フィールドノートの走り書き―③

秧歌（ヤンガー）村の毛おじさん　その２

丹羽朋子（にわともこ）

「地図」がない場所

突然ですが、皆さんはある場所、例えば自分が住む地域の地形や家のまわりの道筋を、どのように把握しているでしょうか？　毎日通る道沿いの風景、或いは道路地図や区画の見取り図を思い浮かべるかもしれません。日本に暮らす私たちは、子どもの頃から地図の読解を習い、街中に溢れる地図や標識に慣れ親しむことで、複雑な地形や街並みを上空からの（いわゆる鳥瞰的な）視点から平面化し、それを記号で表した「地図」のルールを共有しています。私のような研究者の調査報告では、地図による対象地域の位置確認が必須ですが、これもまた、聞き手がその地図を“読める”ことが前提です。

そんな私が中国陝西省･延川県の農村の調査を始めて最初に驚き戸惑ったのが、多くの家に一枚も地図がない、という事実でした。子どもがいる家には、中国全土の地図（行政区域と代表的都市の位置が記してある）の学習用ポスターが壁貼りしてあったりするものの、道路地図等の実用地図に出会ったことはありません。なにせ農村部の村々をつなぐ道には、舗装された公道でも、「○○村はここ右に曲がる」という類の標識がないのです。道がわからなければ、周囲の人を見つけて尋ねるだけです。

黄土の山谷が連なるこの一帯は、外部者が見てもどこも似たような景色ばかり。一方、地元の人たちは、記憶を頼りに目印もない分れ道を、目的地目指してズンズン進んできます。まさに「地図が頭に入っている」ようにみえるのですが、だからと言って彼らに「地図に描いてほしい」と頼むのは、無理なお願いです。見本を描いてみせ、是非にと頼んでトライしてもらっても、図式化の作業に苦労したあげく、断念する人がほとんど。そして皆きまって、「地図なんて生れてこの方、描こうと思ったこともなければ、必要だと思ったこともない」と苦笑します。そう、ここは“地図が要らない”場所なのです。

日本人女性、ヤオトンの村で地図づくりにチャレンジ！

彼らにとっては無用の長物でも、わたしの調査には地図が不可欠。だが、必要なら作ればいいとは、言うは易し行うは難し。辞書によれば、「地図」とは「地球表面を記号、文字などを用いて平面に縮小表現したもの」。陝北地域は起伏の激しい複雑な地形のうえに、山肌に横穴を掘り込んだヤオトンは、まさに大地と一体化した住宅。家々は段々畑状に積み重なり、下のヤオトンの屋上が道路や上のヤオトンの前庭になっているケースも多い。さらに村内の道は、必要とあれば地面の黄土を掘ってならして数日で完成。逆にあまり人が通らなければ、自然と土が積もり、消えてしまう――そんな“自然発生的”（？）な村の構造を「地図」化するのは至難の業です。この地に来てから、幾度かの失敗を経て、私は早々に地図作りから撤退してしまいました。

そんな折、「とりあえず、見えたもの、歩いた道の記録から始めてみようよ！」と励ましてくれる人物が現れます。旧正月をサンワー村で過ごそうと、日本から遊びに来た造形作家の下中菜穂さんです。私達は村のお正月準備の調査の合間に、木枯らし吹きすさぶ寒空の下、村をくまなく歩き回って地図づくりを開始。（とはいえ、後からぜんぜん網羅できていなかったことが発覚するのですが・・・）地形と大体の距離や方角の記録に加えて、イラスト上手な下中さんには歩いたルートや見たものを紙に描いてもらい、わたしの方は歩きながらビデオカメラを回し、周囲の風景やその位置関係、足元の地面の上り下りなどを撮影していきます。その後、寄宿先である毛家に戻ってから二人の記録を照合し、地図にまとめ上げるという作業を続けました。

しかし・・・村の建物は塀で囲まれた集会所以外、ほぼ全て同形のヤオトン、表札などもちろん無い。出稼ぎで住人不在の家も多い。仕方なく「パッチワーク・カーテンがしゃれた家」「剪紙好きの媛媛の家」「子羊を飼う王ばあさん宅」「双子の赤ん坊の家」「ピーナツを山盛りくれた家」などとりあえずの特徴をメモし、大きな木や数軒ごとに共有している石臼など、数少ない目印と合わせて記録。

ところが、迷路のように入り組んだ村では、数十分ぐるぐる歩き回ってたどり着いた先が、午前中に行った家の真下（地の下？）だった、といった事態が頻発。山の上から眺めても、家が穴なので全体像を鳥瞰的に把握するのは難しく、地図に描き起こそうにもどうにもつじつまが合わなくなってしまいます。家に帰って家主の毛水源おじさんに作った地図を見せれば、家々の住人の名や、地形の不明な点を確認できると踏んでいたのですが、彼は地図を一瞥して「自分はわからないし、そもそもそんなものを作る意味がない」の一辺倒。やむをえず我ら二人で地形を再確認しに行ってはまたも混乱、寒さと木枯らしに巻き上がる土埃で意気消沈――そうこうしているうちに新年を迎え、下中さんは帰国、私も他の調査地に移ることになり、地図作りは途中棄権におわりました。

毛おじさん、我が村の地図づくりに立ち上がる

それから１ヵ月後、街で調査中の私に、日本に帰った下

中さんから一通の電子メールが届きました。「地図作り、写真や記憶をたどってもう一度チャンレンジしましたが、わからない場所、つながらない部分、多数有り。確認求む」

添付されていたのは、畑の野菜や果樹、木々につながれた家畜、住人のおばあさんの似顔絵など、村でのさまざまな記憶までもが描き込まれた、にぎやかな「サンワー村マップ」でした。「この地図を完成させよう。」思いたった私は準備に取り掛かりました。

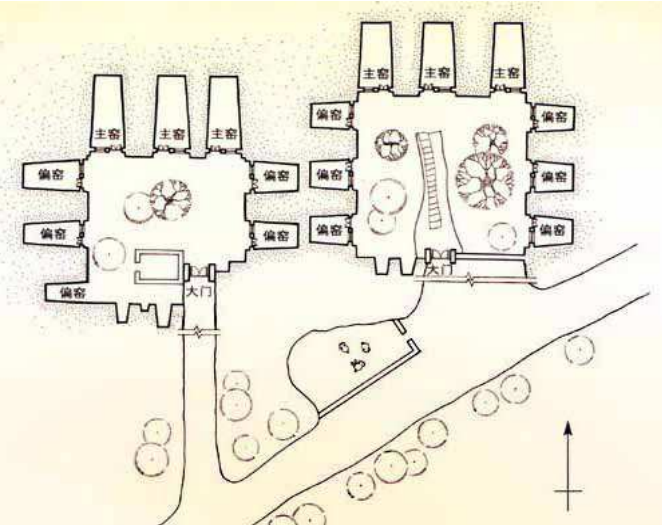
数日がかりで西安まで行き、ヤオトン建築の関連書を入手。本から、建築学科の大学生が数十人チームで専用機材を使って測量、製図したある村の地図や、凧にカメラをつけて空中撮影したり、GPSを利用する方法など、ヤオトンの村と格闘してきた建築や地理学の専門家の足跡を知りました。これを機に、機材も専門知識も欠けている、今、この現地にいる私にできるやり方で、自分が一番知りたいことを調べてみよう、と方針転換。「村の地理を、村の人々がどう見て認識しているのか」に的を絞り、リベンジすることにしました。

季節は移って初春、農村は開墾と種まき作業に忙しい農繁期。サンワー村に帰った私は、毛おじさんに下中さんのイラスト入りマップを見せ、それが未完成だと伝えました。

しばらく黙ってそれに見入っていた毛おじさんは、地図を指差しながら堰を切ったように話し出しました。

「そう、ここは昔、泉があって動物の水飲み場だった。だから水が干上がった今でも家畜を放牧する場所なんだ。こっちに描かれている木は、うちの坂をあがった野原のエンジュの樹だね。樹の下には何代か前の祖先が眠っている。墓の目印なんだ。でも、その向こうにある畑が描かれていない。君らは畑だって気づかなかったんだね。そのまだ先には寝たきりのばあさんの家があるのに。ポンズをまだ連れてったことなかったね――」

おじさんの話はとめどなく続きます。



専門家によるヤオトン地図

「下中先生が日本に帰ってからウチの村を思い出し、忙しい中、地図を描いてくれた。そのことだけで十分嬉しいしありがたい。ポンズ、明日から一緒に地図をつくって、彼女に見せようじゃないか！」

そうは言っても描き方の検討がつかない、と悩む毛おじさんに、私は「外国人である私たちが描いた地図や都会の人たちが使ってるような地図じゃなくて、おじさんが思うやり方で、おじさんが知っている“我が村”の地図を作って欲しい」と伝え、私と一緒に村を歩くが、それぞれが別々に地図を作り、あとで見せ合いっこしようと提案しました。

翌日、おじさんは昨日より2時間ほど早く、朝4時半過ぎには水汲みを済ませ、畑に出ていきました。いつもは日没までやる畑仕事を早々に切り上げ、午後3時には帰宅。筆記用具を片手に地図づくりへ出発です。並んで歩く道すがら、農繁期に作業を休ませてしまったことを詫びる私に、毛おじさんは言いました。

「70年代までの集団労働時代は、病気でも親戚が訪ねてきたって労働を休むことは許されなかった。もちろん、何の作物をどこに植えるかも自分では決められない。今は今日休みたければ自分の裁量で休むことができる。今、わしらは一番自由なんだ。それに、わしは自分がやりたくて、君の地図作りを手伝ってるんだよ。」

おじさんは一軒一軒訪ね、その家に何個のヤオトンがあるのか、用途や増改築はいつかなど細かく尋ねます。村人の中には日本人の地図づくりと聞いて「スパイか？」と怪しむお年寄りや、「そんなことをして何の意味がある。畑仕事はカミさん任せか？」ととがめる中年男性もいました。

しかしおじさんはいちいち、極寒の正月休みに、地図作りという意味不明な作業に奔走したわれら日本人女性について語り、「彼女達はそれほどわしらに興味を持ち、この村を好きになってくれたってことだ」と言って彼らを説き伏せました。その後は世間話に花が咲くため、日に数時間の調査は数件訪ねてあっという間に終了です。

こうして50戸ほどしかない小さな村を毛おじさんと3

家を訪ねてまわる毛おじさん（真ん中）

週間近くかけてめぐっていく間に、村人一人一人の写真を撮り、彼らの歴史や土地分配時の物語、村の土神の場所やご先祖様のお墓――ともに眼に見えるものは何もない――の位置、幽霊付きのスポットにいたるまで、様々な話を聞いた経験は、私のかけがえのない財産となりました。

ある日、村の空き家の記録に取りかかっていると、毛おじさんが突如、道なき崖下へ向かって滑り降りていくではありませんか。慌ててついていくと、そこには半分以上の高さまで土で埋まってしまった洞穴が。「20年以上足を踏み入れていない」というその荒れ果てた土のヤオトンは、8人家族が一穴に暮らしていたという、おじさんの生家でした。「場所が悪くて、水汲みのロバだって下りられないほど急な崖下だ。貧しくてね。でも、今も夢のなかに出てくるのは新しい家ではなく、このおんぼろの家だから不思議だね」そう懐かしく語るおじさんの昔話を、谷を吹き抜ける風が運んでいきました。

毛おじさんが描いた地図

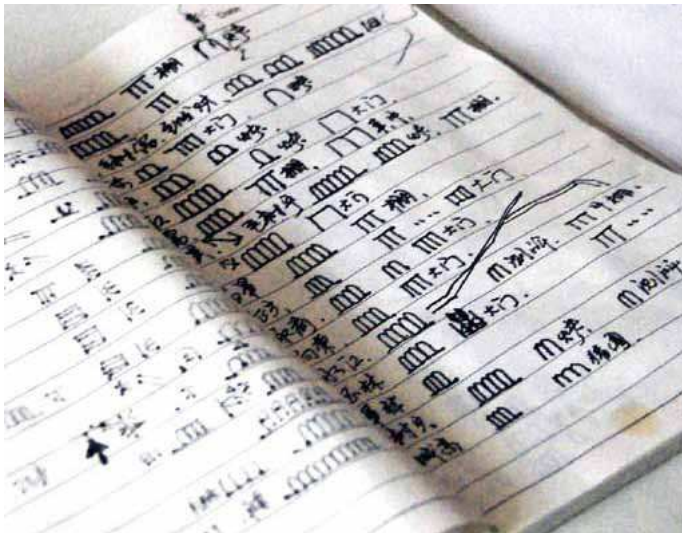
村歩きの最中、毛おじさんが描いていたのは、実は地図ではありませんでした。人が住むヤオトンや入り口の門の素材や大小、家畜小屋の形状、また畑の作物の種類など、おじさんはいくつかのパターンの記号を自ら作り出し、家主の名前の横に、それら家の構成要素の数だけ記号を並べたメモをつけていました。

帰宅後、一人静かに机に向かい、体で覚えている村の道筋や畑の位置を思い浮かべながら、そのメモと合わせて、地図に描いていきます。それは、実際の地形とはすこしずれているものの、家と他の家や畑とのつながりが見事に再現された正確な道順マップであり、微妙なカーブのラインで、その道がどのように上下にうねっているのかもわかるように描かれていました。

「生まれてから60年近くこの村に住んでいるが、サンワーが梨のような楕円形になっていると始めて気づいた。地図を作ろうと思わなければ、生まれた家にも一生行くことがなかった。地図づくりの意味はいまだにわからないけど、面白かったなあ」

と毛おじさん。現在、村の集会所の壁には、大きく引き伸ばしたこの地図が貼ってあり、外からの来客がある度に、それを指差しながら得意げに村を説明するおじさんの姿があります。

近頃、私たちはGoogle Earthなどのインターネット・サイトを使えば、世界中の場所を、宇宙や天空からの視点で、立体的な映像として眺めることも出来るようになりました。でも、地図がなかった村で、自分だけの地図を作り上げた毛おじさんほどには、真剣に自分たちの場所を見ていないのではないかと思うのです。



毛おじさん村歩きメモ

毛おじさんが描いた地図

丹羽朋子（にわともこ）

東京大学大学院文化人類学研究室、博士課程在籍。中国・陝北地域の民間芸術研究の傍ら、日中の出版界をつなぐプロジェクト「一芯社図書工作室」のメンバーとして書籍や展覧会の企画に邁進中。

＊一芯社ウェブサイトを開設しました
http://yixinshe-books.jimdo.com/